高齢者のライフスタイルと生活準備

須田博司・堀田剛吉*・古寺　浩**
・渡邉廣二***・石原敬一****

はじめに

厚生省人口問題研究所の「将来人口推計」によると、本格的な高齢化社会が従来の予測を上回る早さで到来し、1998年には65歳以上の老年人口が14歳以下の子供人口を上回る老若逆転状態になる。

国民誰もが求める「不安のない老後の生活」という視点から、年金や医療保険に代表される社会保障も急速な高齢化社会に対応する抜本的制度の確立が求められる。将来の保険利率予測などの見直しを余儀なくされるのは必至で、厚生年金支給開始年齢引上げにも拍車がかかる。

このような急ピッチな高齢化社会に対し、各家庭において老後生活の安定・充実のための準備として、経済面での年金、医療、介護面での医療制度等、国の財政・社会保障による施策は不十分で期待しても到底対応しきれないであろう。

それ故、各家庭においての自助努力が必要で、どのように生活設計をおこない、どのような生活準備を進めていったらよいか。

これらの問題を検討すべく、本研究は高齢者に焦点を絞って、ライフスタイル・生活設計・生活準備に対する意識の違い、また高齢者の年齢階層による違いを把握したい。

更に、2020年をピークとする高齢者社会において、その時高齢者となる現在の30代を中心とした若年層に対して、豊かな老後生活を実現するための生活設計の必要性を啓発し、生涯学習を通して生活設計意識を高めるための指針を得たい。

備考：生涯学習……内在的転換、外在的転換

生涯学習の先進国といわれているアメリカでの生涯学習のに対する考え方としては、成人を生涯学習に駆り立てる２つの要因があるとしている。

第１は、個人のライフサイクルに内在した就職・結婚・出産などの転換「内在的転換」である。

第２は、外部社会での個人に影響を及ぼす、私たちの社会に絶えず生じている転換「外在的転換」である。

１．研究の目的・方法

１）研究の目的

高齢者のライフスタイルは若い人と違いがあるか、また高齢者の年齢階層による違いがあるのではないか。

生活設計も高齢になるに従い重視されるものと、軽視されるものがあるのではないか。高齢者の老後生活準備は「何がやられているか」「何が不足しているのか」、また各年齢階層においてどのような生活準備が必要であり、『経済・生きがい・人作り・健康保持』等の老後生活準備の具体的な指針を見出す事を研究目的とした。

本研究は特に高齢者に焦点を絞って分析をする。すでにライフスタイルの整理や生活条件・ライフスタイル・ライフステージ別の生活意識については、東海女子短大紀要第18号にて「ラ

*：岐阜大学　**：金城学院大学短大部　***：鳴門教育大学　****：名古屋音楽大学

イフスタイル別の生活準備」、第１報ライフスタイルと生活意識、第２報ライフスタイルと経済準備として報告してあるので参照されたい。[注1)]

今回の高齢者に焦点を絞った上記研究目的を考察すべく下記のような具体的課題と課題に基ずく調査仮説をもって分析を進めた。

研究課題

①高齢者のライフスタイルの特徴と若・中年者との違い
②高齢者の年齢階層別ライフスタイルの特徴
③生活設計意識と高齢者の年齢階層別の特徴
④生活準備意識と高齢者の年齢階層別の特徴
⑤これらを通しての課題と提言

調査仮説

①年齢階層別によってライフスタイルに違いがあるのではないか。
②ライフスタイルは性別・居住地別で違いがあるのではないか。
③年齢階層別によって生活の満足度に違いがあるのではないか。
④年齢階層別によって生活設計の期間・内容に違いがあるのではないか。
⑤年齢階層別によって経済準備の内容が違うのではないか。
⑥高齢者の性別・居住地別で生活の満足度、生活設計の期間・内容、経済準備の内容が違うのではないか。
⑦高齢者になるほど老後生活の準備「経済・生きがい・介護者・保健保持」準備が出来ているのではないか。
⑧高齢者の性別・居住地別で老後生活の準備「経済・生きがい・介護者・健康保持」準備に違いがあるのではないか。
⑨総合して高齢者の生活準備はライフスタイル別にバラツキがあるのではないか。

2）研究の方法

研究の目的を達成するためアンケート調査を平成３年７月～８月上旬に実施した。[注2)]

①居住地別、年齢階層別、性別のフェイスシートに見合う、幼稚園１園、小学校・中学校・大学各２校の保護者・親及び２老人会の会員を対象とした。

②配布総数1,823で、有効回収数は1,552（85.1%）であった。

③有効回答者の内訳は、「男性793、女性750、不明９」・「都市（主に岐阜市・名古屋市）794、農村（主に岐阜県下）743、不明15」合計1,552名であった。

調査表・調査の内容は省略するが、詳細については前述紀要第18号54頁を参照して頂きたい。

2．若・中年齢者と比べた高齢者のライフスタイルの特徴

1）ライフスタイルと年齢

若・中年齢者と比べた高齢者のライフスタイルの特徴をみるために、回答者を40歳未満、40歳以上60歳未満、60歳以上の３階層に分け、それぞれの階層のライフスタイルについて整理した（図－１）。

「40歳未満」で多いライフスタイルは、食生活重視スタイルとまんべんスタイルで、この両者の合計で45.0%になる。この年齢層に属する人たちは成長過程にある子供をもつ人が多く、そのために食生活を重視するものと考えられる。また、この年齢層では他の年齢層に比べて特定のライフスタイルを選択するという志向が弱く、それがまんべんスタイルとなって現われている。

「40歳以上60歳未満」の年齢層では食生活重視スタイルがやや減少し、老後生活重視スタイルが大きく増えている。この両者の合計で44.5%になる。図には示さないが、40歳代と比べると、50歳代で老後生活重視スタイルが増加する。

「60歳以上」では老後生活重視スタイルが35.7%と大きな割合を占める。ついでレジャー生活重視スタイルが21.3%を占め、両者の合計で57.0%になる。

年齢が高くなるとともに多くなるライフスタイルは、老後生活重視スタイル、レジャー生活重視スタイル、および家の格式重視スタイルの

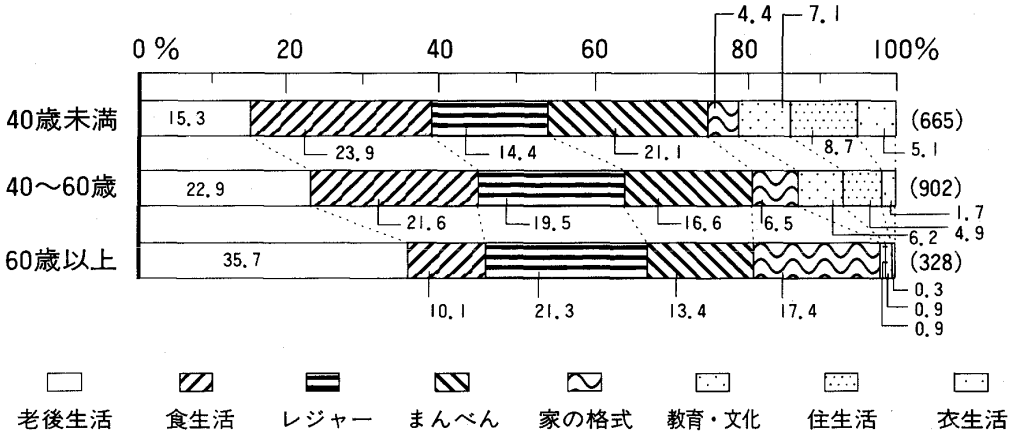

図1　ライフスタイルと年齢　　単位：％（実数）

3種類のライフスタイルであり、逆に年齢が高くなるとともに少なくなるライフスタイルは、食生活重視スタイル、まんべんスタイル、教育・文化重視スタイル、住生活重視スタイル、そして衣生活重視スタイルの5種類のライフスタイルである。

以上のことから、若・中年齢者と比べた高齢者のライフスタイルの特徴を整理しよう。

第1に、高齢者では老後生活重視スタイルの割合が大きいことである。40歳未満の年齢層の2倍以上、60歳未満の年齢層の1.5倍以上の割合で老後生活重視スタイルを選択している。

この調査の質問は「現在の生活の中で大切にしている事は何ですか」であり、これに対してわれわれが列挙した選択項目の中で老後生活重視スタイルに該当する選択肢は①「老後のため収入を増やし、支出の節約に努力する生活」、②「親孝行の子供を育て、介護者づくりを大切にする生活」、③「老後の生きがいづくりを大切にする生活」、④「老後生活のため貯蓄を大切にする生活」の4つである。いずれも将来の老後生活に対する備えという観点である。60歳以上の年齢層でこうした将来の備えを内容とするライフスタイルが多く選択されることは一見すると奇妙である。

これには2つの理由があると思われる。1つは、高齢者になってもさらに将来の生活に備えたいという意識が強いこと、もう1つは、高齢者では食生活、教育・文化生活、住生活、衣生活というような若年齢層で選択されるライフスタイルに対する要求が、ライフステージの違いにより弱くなり、その結果として老後生活重視スタイルの割合が大きくなったと考えられる。

第2に、上でも少しふれたが、高齢者では若・中年齢者と比べてライフスタイルの選択の幅が狭いことである。老後生活重視スタイルとレジャー生活重視スタイルの2種類で57.0％を占めており、さらにこれに家の格式重視スタイルを加えると74.4％に達し、回答者の4人のうちの3人までがこれら3種類のライフスタイルのいずれかに含まれる。これに対して、教育・文化生活、住生活、衣生活というような若年齢者では数％の割合で選択されるライフスタイルに対する要求がきわめて小さく、いずれも1％にも達しないほどである。

第3に、高齢者で急速に増加するライフスタイルとして家の格式重視スタイルがある。60歳未満までの年齢層では数％にすぎないが、60歳以上では17.4％の割合を占める。

2）ライフスタイルと地域

居住地域別にライフスタイルを整理すると、59歳以下の年齢層では都市と農村では、選択されるライフスタイルに有意な差が見られなかった（表1）。ところが、60歳以上の年齢層では、都市と農村で危険率0.1％で有意な差が生じた（表2）。

表1　都市・農村別ライフスタイル（59歳以下）　単位：%

スタイル／居住	食生活	老後生活	まんべん	レジャー	その他	計
都市	22.1	19.5	17.0	19.1	22.3	784人
農村	22.5	20.4	19.9	15.7	21.4	763人

$\chi^2=4.77$　＊ $p>0.05$

表2　都市・農村別ライフスタイル（60歳以上）　単位：%

スタイル／居住	老後生活	レジャー	家の格式	まんべん	その他	計
都市	29.7	28.6	13.7	12.0	16.0	175人
農村	42.5	13.1	21.6	15.0	7.8	153人

$\chi^2=20.83$　＊＊＊ $p<0.001$

農村居住の60歳以上年齢層では、老後生活重視スタイルが42.5%と大きな割合を占め、これに家の格式重視スタイルを加えると64.1%に達する。これに対して都市居住者では、レジャー生活重視スタイルが28.6%と相対的に大きい。また、その他のライフスタイルも選択されており、農村居住者に比べて、ライフスタイルの選択の幅が広いという特徴を示している。

3）ライフスタイルと性別

男女の性別にライフスタイルを整理すると、この場合には、59歳以下の年齢層においてもまた、60歳以上の年齢層においても有意な差が見られた（表3、表4）。

まず、59歳以下の年齢層では、女性が食生活重視スタイルを42.5%の高率で選択していることが注目される。これに対して男性では、老後生活重視スタイルが28.6%を占め、相対的に大きい。男女のこうしたライフスタイルの差異は、家庭生活における家事労働の性別役割分担と生活設計の主体における意思決定力の差異に基づくものと思われる。

これにたいして、60歳以上の年齢層でも男女のライフスタイルに有意な差が見られるのだが、この場合は、レジャー生活重視スタイルが男性で27.8%、女性では8.9%であるところに特徴がある。59歳以下の年齢層で差の見られた老後生活重視スタイルでは差が見られない。

また、選択されるライフスタイルの幅に注目すると、59歳以下の年齢層では女性よりも男性のほうが幅が広かったのだが、60歳以上の年齢層では、むしろ女性のほうが選択の幅が広くなっている。

ライフスタイルを年齢階層別に地域と性別から分析すると、ライフスタイルの選択の幅がせまくなる段階を見いだすことができる。生活の豊かさの条件のひとつがライフスタイルの選択の幅の広さであると考えるならば、今回の調査の結果に基づいて、こうした条件の整備を家庭や地域のなかで進めることが求められる。

表3　性別とライフスタイル（59歳以下）　単位：%

スタイル／性別	食生活	老後生活	まんべん	レジャー	その他	計
男性	29.7	28.6	13.7	12.0	16.0	175人
女性	42.5	13.1	21.6	15.0	7.8	153人

$\chi^2=128.08$　＊＊＊ $p<0.001$

表4　性別とライフスタイル（60歳以上）　単位：%

スタイル／性別	老後生活	レジャー	家の格式	まんべん	その他	計
男性	36.1	27.8	16.7	10.6	8.8	216人
女性	34.8	8.9	18.8	18.8	18.8	112人

$\chi^2=22.10$　＊＊＊ $p<0.001$

3．高齢者の年齢階層別ライフスタイルの特徴

この節では、高齢者のライフスタイルを年代別の特徴としてとらえ、更に主要なスタイルで重視した要因の分析をしたい。

まず、高齢者のライフスタイルの特徴としては、「老後生活重視スタイル」について、「レ

ジャー生活」「家の格式重視」のスタイルが問題となり、次いでまんべんスタイル、食生活重視スタイルとなる。この結果を年代別に表にしてみた（表５）。

「老後生活重視スタイル」とは、高齢者であるが今後の生活をより大切にするという考え方であろう。これは年代別の特徴として、あまり大きな差は出ていない。しかし「レジャー生活重視スタイル」は、若い年代から通して多いタイプである。「食生活重視スタイル」は、70歳前半と60歳前半などに支持者が強い。これは健康への意識などの関係があると思われる。「家の格式重視スタイル」は、高齢者に多くなるという特徴がある。「まんべんスタイル」も若い人に比べるとやゝ少ないが、「衣生活・住生活・教育重視の各スタイル」はより少なくなる。

次に、高齢者の性別によるスタイルの違いをみたい。一般に重視傾向には、「老後生活重視」や「家の格式重視」「まんべん生活」などが比較的大きく類似性も強い（図２）。

しかし両者の大きな差のあるものとしては、「レジャー重視」が男性に多いのに対し、女性は「食生活重視」「まんべん型重視」の傾向が強い。また図には出さないが、レジャーについては、女性の年代が70歳以降になるととくに弱くなっていく。これら年代の女性が社会活動面で、消極的であるためと思われる。

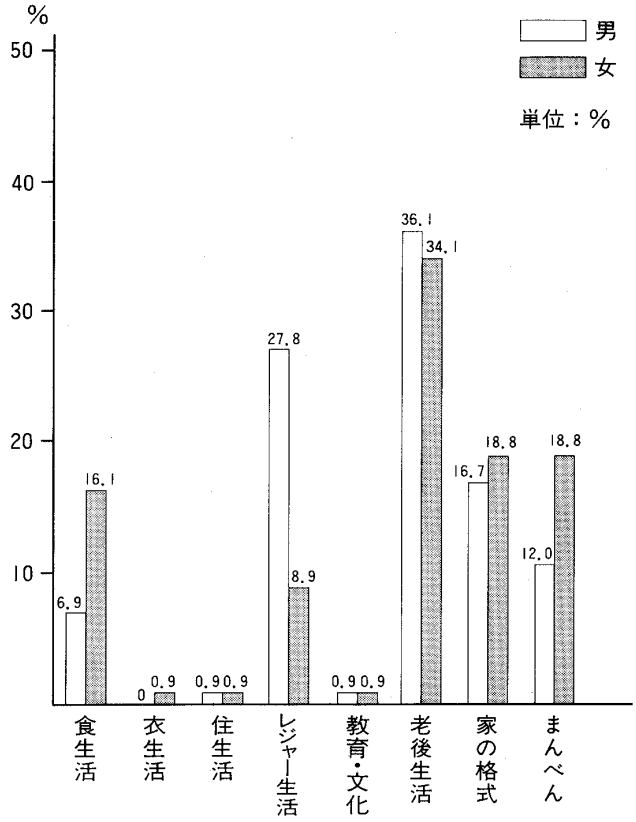

図２　高齢者の性別によるライフスタイル

この問題を地域別として、都市・農村で比較した。これにはかなり顕著な差異がでている。

表５　年齢階層別ライフスタイル

単位：%（人）

年齢＼スタイル	食生	衣生	住生	レジ	教育	老後	家格	まん	計（実数）
60～64歳代	11.7	0.0	1.7	21.7	0.0	35.0	18.3	11.7	100.0（ 60）
65～69歳代	4.0	1.0	1.0	22.2	1.0	36.4	17.2	17.2	100.0（ 99）
70～74歳代	16.7	0.0	1.4	22.9	1.4	34.7	15.3	11.0	100.0（ 72）
75～79歳代	11.3	0.0	0.0	21.0	0.0	33.9	19.4	14.5	100.0（ 62）
80歳～	8.6	0.0	0.0	22.9	2.9	40.0	17.1	8.6	100.0（ 35）
合　計	10.1	0.3	0.9	21.3	0.9	35.7	7.4	13.4	100.0（328）

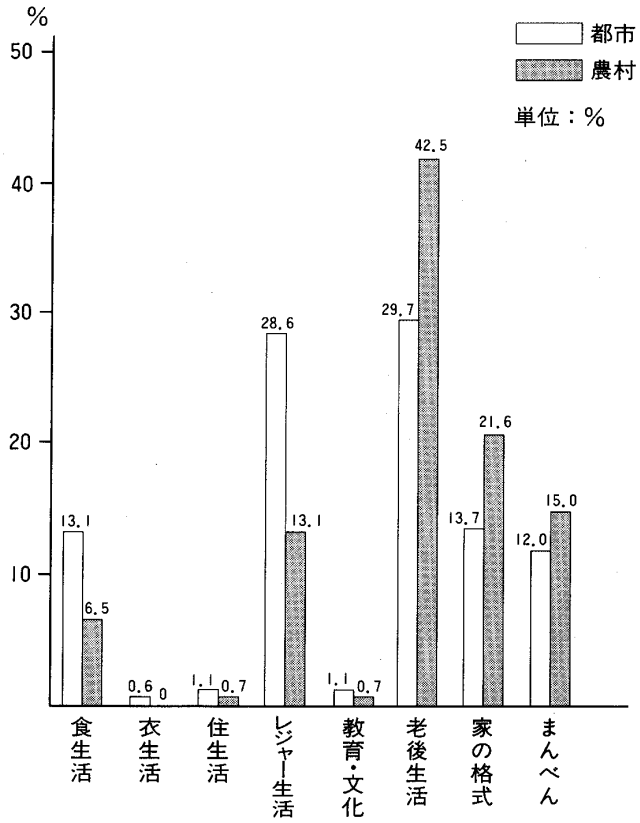

図3　高齢者の都市・農村部別ライフスタイル

都市部は「レジャー生活重視」「食生活重視」のスタイルがより多い。この内容は、都市がレジャー施設の充実や、栄養・健康の教育などに対する整備が必要であろう。農村は「老後生活重視」のスタイルを大切にする人が多い。農村部は一般に高齢者の比率が高いし、高齢者自身自分の今後の生活を考える人が多いためであろう。

次に、比較的選択者の多かった4つの重視スタイルについてそのスタイルを特徴づける選択要因について分析してみたい（図4）。

一般に食生活は、若い人に多く選択されているが、高齢者で選んだものは全体の8.0%でしかない。この中では「食材料にこだわる生活」を大切にするを選んだ人が31.7%と一番多く、ついで「食べることを楽しむ生活」30.8%と大差がない。しかし「料理づくりを楽しむ生活」の人は16.3%しかない。料理は仕事と考えている人が多いためであろう。この中での年代別構成比には大差なかったが、比較的若い60歳～64

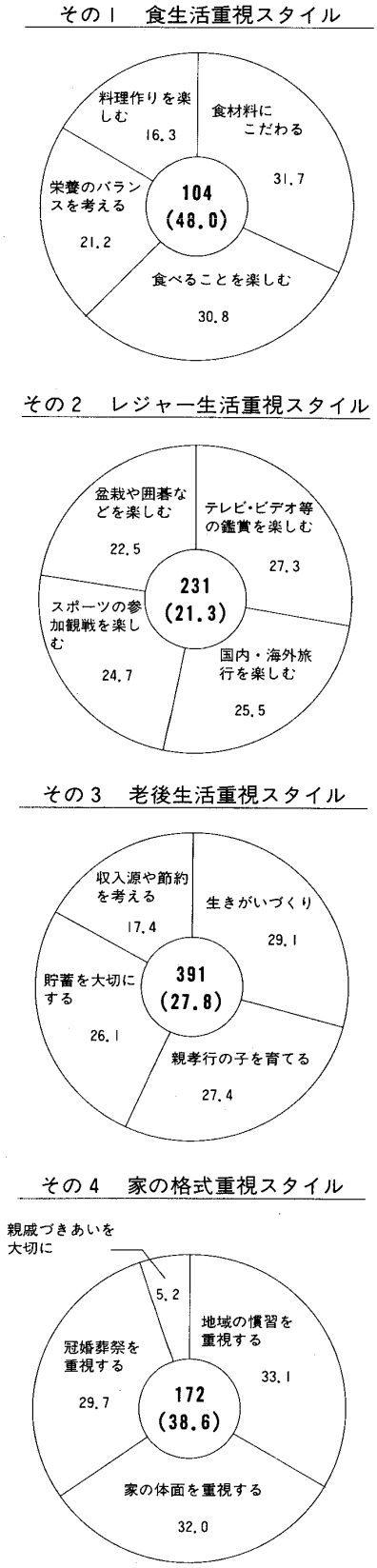

図4　重視スタイルの要因

注1．単位：%と実数
　2．中の数値は実数で，（　）は全体の中で占める割合
　3．各々の要因には，すべて生活という言葉をつけて調査した。

歳に料理づくりを楽しむ人が多いように分析された。

「レジャー生活重視スタイル」では、高齢者は調査者全体の21.3%を占める程度であるし、4つの選択要因もきわめて均等に近かった。その中では「テレビ・ビデオ等の鑑賞を楽しむ生活」の人が27.3%とやゝ多かった。なお図には出さないが、年代別でその要因をみると、比較的差は少ないが、旅行などはとくに65歳～69歳層に多いように思われた。

「老後生活重視スタイル」では、高齢者になるとやゝ増加する傾向にあり、全体の中の27.8%になった。今後の生活の安定を望んでいるためであろうか。この中で最も大切にするのは、「生きがいづくりを大切にする生活」で全体の29.1%であるが、ついで「親孝行の子を育てる生活」が27.4%あった。若干高齢者に子ども教育に対する反省的傾向が出ているように思われた。年代別の図は割愛するが、とくに65歳～69歳に親孝行の反省傾向がやゝ強く出ていた。

「家の格式重視スタイル」は、調査全体の中で38.6%を占め、高齢者になるとウエイトがかなり高くなることがわかった。

この中で、選択要因では「地域の慣習を重視する生活」が33.1%と多い。しかし「親戚づきあいを大切にする生活」は5.2%しかなく、若い年代層と同様に少なかった。図には出さないが、高齢者の年代別比較では65歳～69歳層にやゝ家の体面にこだわる人が多いように思われた。

以上の分析から、「家の格式重視スタイル」「老後生活重視スタイル」などに高齢者のウエイトが高いが、その中で生きがいを求めていることや、地域の慣習を大切にする意識が強いなど、古い慣習を守る姿勢が強いなかで堅実な生活を考えているものと思われる。

4．高齢者の生活設計意識と年齢階層別の特徴と違い

本節の目的は、高齢化社会の中で特に高齢者に焦点を絞って生活設計に対する意識の違いを高齢者を中心に年齢階層別に把握することによって、豊かな老後生活を送るべく、生涯学習を通して、生活設計意識を高めるための指針を得るものである。

この研究はすでに、東海女子短大紀要代18号「ライフスタイル別の生活準備」（第1・2報）において生活設計の期間を年齢階層別に考察し、若年層においてとくに目先の生活に対する設計しかできていないという問題点を指摘した。

これに対して、本報では、生活設計の具体的内容、しかも経済準備の内容として老後生活の準備に、他の準備項目との綱引き問題として、どのような優先順位をつけているかということを年齢階層別に考察する。

表6は、内在的転換[注3)]にたいする経済準備の内容として優先順位を付けて老後生活を選択した者と選択しなかった者の全調査標本の年齢階層別分布をあらわした表である。調査票の設問段階では、経済準備の項目に順位付けをし、第3位まで回答をしてもらっている。老後生活以外の経済準備設定設問項目は前第2報の表8を参照されたい。

表6において考察されることは、まず、具体的経済準備の内容として、老後生活を重視している者の割合が、20歳代の13.9%から64歳に至るまで上昇し、65歳以降では徐々にではあるが、減少している点である。高齢化社会の国際比較の目安に用いられる65歳という年齢は、この結果からすると生活者自身の意識の中でも自らの老後の到来の内在的転換点と考えられているようである。若年層における優先順位として高い選択項目では、子供に対する教育・結婚準備があるが、年齢階層が高まるにつれて、自らの転換点である老後生活準備に力点が移行することが考察される。

表7、表8は、この結果を性別（男・女）および、居住地（都市・農村）という視点から再集計した結果である。表7では、老後生活を重視する度合いとして、若年層においては、男性の方が43.1%と女性の40.8%を上回っているものの、高齢者層においては男性の86.9%に対して、女性は88.5%と、女性の方が老後生活に対

表6　年齢階層別経済準備としての老後生活のとらえ方の違い（全標本）

項目／年齢	経済準備内容として老後生活を選択した者				老後生活を選択しない者	合計
	小計	第1位	第2位	第3位		
20歳代	5 13.9%	0 0.0%	2 5.6%	3 8.3%	31 86.1%	36 100.0%
30歳代	166 31.9%	16 3.1%	36 6.9%	114 21.9%	355 68.1%	521 100.0%
40歳代	283 47.1%	33 5.2%	61 10.1%	189 31.4%	318 52.9%	601 100.0%
50歳代	89 64.5%	17 12.3%	23 16.7%	49 35.5%	49 35.5%	138 100.0%
60～64歳	41 91.1%	11 24.4%	13 28.9%	17 37.8%	4 8.9%	45 100.0%
65～69歳	70 88.6%	21 26.6%	38 48.1%	11 13.9%	9 11.4%	79 100.0%
70～74歳	50 84.7%	10 16.9%	21 35.6%	19 32.2%	9 15.3%	59 100.0%
75～79歳	38 82.6%	13 28.3%	22 47.8%	3 6.5%	8 17.4%	46 100.0%
80歳以上	25 92.6%	6 22.2%	15 55.6%	4 14.8%	2 7.4%	27 100.0%
合　計	767 49.4%	127 8.2%	231 14.9%	409 26.4%	785 60.6%	1552 100.0%

する準備を重視していることがうかがえる。これは、昨年度の簡易生命表から考察すれば、ほぼ6歳という男女の平均寿命の差（被調査者自身にとっては、0歳時における平均余命である平均寿命よりは、当該年齢における平均余命の方が重要な意味を持つことは当然であるが）と男女の平均結婚年齢の差を合わせた7～8年弱の期間は、女性が寡婦として、一人で老後を送らなければならないと予測されるが、調査の結果は、このことに対する準備意識の表れであると考察される。表8においては、若年層において、都市よりも農村の方が若干老後生活準備に対する意識が高いともいえるが、男女の差ほど大きな、明確な差はなかった。

また、本研究では、調査の中で「老後の生活費は、主として何でまかなうつもりですか」という設問項目を設け優先順位第3位までを問うているが、表9は、その結果をまとめたものである。その結果考察としては、すべての年齢階層で公的年金が優先順位的に第1位となり、全標本平均でも85.6%の人たちが第3位までにあげている。また、今日的には私的年金もずいぶん充実してきているものの、現在高齢者階層に属する人たちの若年時代には未整備の状態であり、選択率は59歳以下の57.0%に対し、80歳以上の7.4%へと、年齢階層の高まりとともに選択者が減り、あまり期待はしていないようである。また、年齢の高まりとともに子供からの援助に対する期待は、59歳以下では10.0%であるのに対し、以後60～64歳での24.4%から80歳以上での40.7%へと徐々に高まる傾向がうかがえる。しかし、冒頭で述べた外在的転換[注4)]として、高齢化が進む中で、高齢者福祉財政の圧迫から、公的年金の支給年齢引き上げや、支給額の縮小という政策の可能性もあり、公的年金以外の私的年金・預貯金など自助努力の必要性は、ますます高まる傾向であろう。さらにつけ加えて、表6から表9の結果を併せて考えるとき、これから老後を迎える年齢階層においては、自らの子供の教育・結婚、さらに、自らの親に対す扶養という2つの経済的負担または責任を強いられる中で、自らの豊かな老後のための準備もし

表7　年齢階層別経済準備としての老後生活のとらえ方の違い（男・女）

項目／年齢	男			女		
	選　択	非選択	合　計	選　択	非選択	合　計
59歳以下	279 43.1%	360 56.9%	633 100.0%	267 40.8%	387 59.2%	654 100.0%
60歳以上	139 86.9%	21 13.1%	160 100.0%	85 88.5%	11 11.5%	96 100.0%
合　計	412 52.0%	381 48.0%	763 100.0%	352 46.9%	398 53.1%	750 100.0%

表8　年齢階層別経済準備としての老後生活のとらえ方の違い（居住地）

項目／年齢	都　市			農　村		
	選　択	非選択	合　計	選　択	非選択	合　計
59歳以下	266 40.6%	389 59.4%	655 100.0%	273 43.6%	353 56.4%	626 100.0%
60歳以上	12 87.8%	17 12.2%	139 100.0%	102 87.2%	15 12.8%	117 100.0%
合計	388 48.9%	406 51.1%	794 100.0%	375 50.5%	368 49.5%	746 100.0%

表9　年齢階層別老後生活費と考えている項目

項目／年齢	勤労・事業収入	公的年金	私的年金	退職金・預貯金引出	財産収入	資産売却収入	子どもからの援助	その他	標本数（人）
59歳以下	49.6%	85.6%	57.0%	57.9%	15.0%	5.7%	10.0%	2.4%	1296
60～64歳	37.8%	82.2%	31.1%	44.4%	11.1%	4.4%	24.4%	2.2%	45
65～69歳	24.1%	92.4%	15.2%	51.9%	20.3%	7.6%	29.1%	3.8%	79
70～74歳	13.6%	84.7%	13.6%	45.8%	20.3%	5.1%	29.3%	5.1%	59
75～79歳	19.6%	73.9%	8.7%	41.3%	19.6%	6.5%	39.1%	6.5%	46
80歳以上	7.4%	96.3%	7.4%	44.4%	25.9%	11.1%	40.7%	18.5%	27
合　計	698 45.0%	1329 85.9%	779 50.2%	870 56.1%	243 15.7%	91 5.9%	208 13.4%	46 3.0%	1552 ——

注：各セルの数値は、上欄選択項目選択者数の各年齢階層の標本数あたりの割合である。

なければならないという困難に迫られいることが考察される。

5．高齢者の生活準備意識と年齢階層別の特徴

本節では、高齢者を中心として老後生活の準備「経済」・「生きがい」・「介護者」・「健

康保持」の4項目についての分析を行った。

1）全体比較分析

①年齢階層別では、経済・生きがい準備とも半数近くの人が「出来ている・少し出来ている」（以下特に断りのないのは、この合計を出来ているとする）と回答しているが、介護者・健康保持は3割にも満たない数値である（表10）。「経済」は年齢が上になってくる程、準備が出来ており60歳以上の59.4%対し、40～50歳代は47.2%、20～30歳代は35.4%と減少してくる。しかし、「生きがい」は年齢での差異はほとんどなく、40～50歳代が1番出来ている。「介護者」・「健康保持」準備は各年齢層とも低い数値で、60歳以上高齢者層ででも「31.6%」・「33.6%」しか出来ていないと意識している状況である。この項目は若・中年層はまだしも、高齢者にとっては重要な問題であり、高齢者の年齢階層別でより詳細に分析する。

表10　「老後生活」の準備

出来ている・少しは出来ているの合計　　単位：%

項目＼準備		経　済	生きがい	介護者	健康保持
年齢	20～30歳代	35.4	46.0	17.6	25.9
	40～50歳代	47.2	48.6	23.3	24.2
	60歳以上	59.4	46.9	31.6	33.6
男女	男　子	47.2	46.5	25.3	27.5
	女　子	42.7	48.0	19.9	25.1
居住	都　市	44.2	47.7	21.8	26.2
	農　村	46.0	47.0	23.3	26.5
合　計		45.0	47.3	22.6	26.4

②男女別、居住地別での準備状況は表10のようにほとんど差はないが、男女別ので「経済」・「介護」で「4.5%」、「5.4%」と女性の方が少なく、平均寿命の長い女性が経済準備が出来てなく、又夫等の介護はするが自分自身の事は考えていないようである。これも高齢者の年齢階層別でより詳細に分析する。

2）高齢者を中心として

①「経済」準備

高齢者だけの「経済」準備をみると、やはり年齢階層が上がるとともに出来ている人が多いが（60～64歳・51.1%、65～69歳・60.8%、70～74歳・62.7%、75～79歳・66.6%）。60～64歳は「少し不安・不安である」（以下、特に断りのないものはこの合計を不安であるとする）が33.3%もあり、退職し年金生活への不安があるのではないか。

表11　年齢階層別老後生活準備「経済」　　単位：%

年齢＼項目	出来ている少しは出来ている	少し不安である不安である	全く考えていないN・A	合　計（実　数）
59歳以下計	42.1	43.3	14.6	100.0(1296)
60～64歳	51.1	33.3	15.5	100.0(45)
65～69歳	60.8	21.5	17.8	100.0(79)
70～74歳	62.7	15.3	22.1	100.0(59)
75～79歳	56.5	19.5	23.9	100.0(46)
80歳以上	66.6	22.2	11.1	100.0(27)
60歳以上計	59.3	21.9	18.8	100.0(256)

男女比較をすると、表にはしなかったが男性は「出来ている」が年長になる程高くなって行くが（60～64歳・51.5%、65～69歳・50.0%、70～74歳・66.6%、75～79歳・62.9%、80歳～72.2%）、女性は65～69歳の75.6%以外は50%前後と男性に比して低い数値である。「不安である」の数値も多くなく、「全く考えていない、N・A」がおおくあり、余り全体の経済準備について考えていないと見た。

又、都市・農村との比較は、今回調査数は少ないが大きな差異がでた（図5、図6）。都市は60～64歳・63.1%、65～69歳・67.4%と出来

ている人が多く、高齢者になる程出来ているの回答が少なくなってくる（75～79歳・59.2%、80歳～・52.3%）。これに対して農村は75～79歳・80歳以上を除いて50%前後しか出来ていなくて、特に60～64歳は「不安がある」が38.5%（出来ている42.0%）となっているが、高齢者になるにしたがって不安がなくなり、65歳以上になると経済準備は「全く考えていない」が1割以上の人がいて都市との差がハッキリ出ている。これは農村特有の生活に困らない・何とかなるとの考えから、準備も都市と比較し「出来ている」が少ないと考えられる。

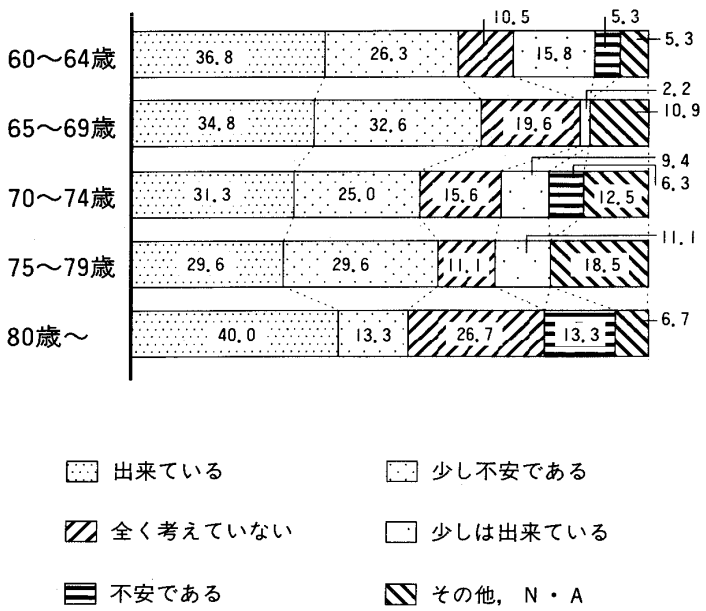

図5　都市の老後生活準備「経済」

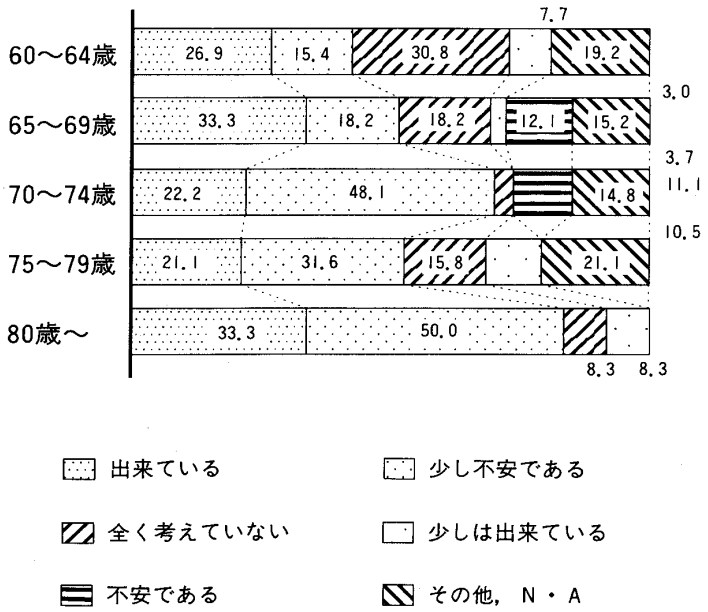

図6　農村の老後生活準備「経済」

②「生きがい」準備

「生きがい」準備は全体的にみると、年齢、男・女、都市・農村別での差が無いのが特徴であったが、70～74歳に特異な数値が出た。60歳以上の準備が「出来ている」平均値が46.9%に対し、70～74歳は32.2%と低い率であり、また「不安30.5%」、「全く考えていない15.3%」、「その他、N・A22.0%」とは他の年齢に比して高い数値である。これは男女・居住地別分析でも同様で、特に出来ているが女性21.7%、都市25.0%と低い結果であった。前述の「経済準備」では平均値よりも高い準備状況であったが、生きがい準備は目立った。これを解明する資料がなく・調査対象も少なかったので今後の研究課題としたい。

この70～74歳を除いた高齢者間の差異を見ると、年齢階層が上がると共に僅かではあるが出来ている数値が高くなり、男女別では男性は年長と共に上昇・女性は年齢間の差はなかった（表12参照）。これは男性が定年で職業から離れ「生きがい」を見つけようと努力し・不安も多い（不安である…60～64歳・33.3%、65～69歳・30.4%）のに対し、女性は既に「生きがい」を見出しているとみた（出来ている…60～64歳・58.4%、65～69歳・51.5%）

居住地別では、表12のようにバラツキがあり分析が難しいが、都市の60～64歳が特に高い数値になっているが、他は余り差がない。しかし、全体をみると「その他、N・A」が18%前後と多く、「全く考えていない」も70～74歳は15%前後あり、今後の対応を考える必要がある。

表12　年齢階層別（60歳以上）・老後生活準備「生きがい」

…男・女と都市・農村…　　単位：%

性別	項目／年齢	出来ている少しは出来ている	居住	出来ている少しは出来ている	不安である少し不安である	全く考えていない	その他 N・A
男性	60～64歳	45.5	都市	68.4	26.3	0.0	5.3
	65～69歳	45.7		47.8	26.0	2.2	17.4
	70～74歳	38.9		25.0	40.6	15.6	18.8
	75～79歳	55.5		51.8	18.5	7.4	22.2
	80～　歳	61.1		53.3	20.0	13.3	13.4
	小　計	47.5		46.8	27.3	8.6	17.3
女性	60～64歳	58.4	農村	34.6	34.6	7.7	23.1
	65～69歳	51.5		48.5	27.3	6.1	18.2
	70～74歳	21.7		40.7	18.5	14.8	25.9
	75～79歳	57.9		63.2	10.5	0.0	26.4
	80～　歳	44.4		58.4	0.0	16.7	25.0
	小　計	45.9		47.0	21.4	8.5	23.1
合　計		46.9		46.9	24.6	8.6	19.9

③「介護者」準備

全体比較（表10）からみると、介護者準備は年齢増と共に準備が出来ており（20．30歳代・17.6%、40.50歳代・23.3%、60歳以上・31.6%）、女性より男性の方が若干高かった。更に他の回答を見ると表13のように、59歳以下で「全く考えていない」が30.9%もあるのに対し、60歳以上の高齢者は「その他、N・A」回答が22.3%と多くあった。

また、60歳以上の年齢階層別でみるとほとんど差異は見られなかった。その中で、特に目立つのは表にしなかったが65～69歳で「不安である」が45.6%と高い数値で、その階層の男性が50.0%、都市47.8%が不安回答をしており、都市・男性が介護準備が最も出来ていないと考えている。80歳以上を見ると、調査数は少ないが

表13　年齢階層別の老後生活準備「介護者」単位：%

項目／年齢	出来ている少しは出来ている	不安である少し不安である	全く考えていない	その他 N・A	合　計（実数）
59歳以下	20.8	45.6	30.9	2.7	100.0 (1296)
60歳以上	31.6	36.7	9.4	22.3	100.0 (256)
合　計	22.6	44.1	27.3	6.0	100.0 (1552)

「出来ている」と「不安である」が男女、都市・農村とも全て半数づつであり、高齢者の介護者不安に対しての地域及び行政での対応が望まれる点である。

④「健康保持」準備

前述の「介護者」準備同様、出来ている人が少ないのが「健康保持」であった。しかし、「全く考えていない」は他の老後準備生活より少なく、60歳以上では2.0%、59歳以下でも8.0%（20歳代・19.4%、30歳代・9.2%、40歳代・7.5%、50歳代・2.2%）と非常に少なく、関心度は高い項目と言える（表14）。

これを、60歳以上の年齢階層別で見ると、ほとんど差がなく出来ている人は31～35%程しかなく、「その他、N・A」回答が15～29%近くあるのは介護者準備と同様であった。

性別でみると表にはしなかったが男性はほとんど差がないが、女性の方にはバラツキが見られた。60～64歳・42.5%、75～79歳・42.1%が出来ていると高い数値で他の階層より10%以上差があるが、「不安であると対比して見ると、60～64歳は不安も同率あり、また75～79歳は26.3%と不安回答は少なかったが、「その他、N・A」が31.6%あった。

更に居住地で見ると表15のごとく、都市・農村との差異がある。60歳以上の全体平均で見ると「出来ている」は都市の方が6.8%高く、「不安である」は農村の方が7.4%高い。また年齢階層別で見ると、都市では60～64歳の準備が出来ている最も高く、高齢化になるほど若干低くなっていくが、農村はバラツキがあった。

今回調査では人数も少なく比較出来る資料も少ないが、「健康保持」に対しては50歳代から関心が高くなり、60歳以上は健康保持に努めるが不安も多い。特に都市に高齢者の健康志向が強く、男性は年齢間の差異は少ないが、女性にはバラツキが見られた。

高齢者社会での健康保持対策も居住地別・性別・年齢階層別での対応が望まれる。

以上老後生活準備「経済」・「生きがい」・「介護者」・「健康保持」の状況について述べてきたが「経済」「生きがい」はまだしも「介護者」「健康保持」準備については3割強の人しか出来ていない。これらの問題を中心に地域及び行政での対応・今後の課題を検討していく必要があろう。

表14　老後準備生活「全く考えていない」割合　単位：%

年齢＼生活	経　済	生きがい	介護者	健康保持
59歳以下	13.6	17.9	30.9	8.0
60歳以上	5.5	8.6	9.4	2.0

表15　年齢階層別（60歳以上）の都市・農村
老後生活準備「健康保持」　単位：%

居住	年齢＼項目	出来ている 少しは出来ている	不安である 少し不安である	全く考えていない	その他 N・A	合　計 (実数)
都市	60～64歳	47.4	47.4	0.0	5.3	100.0 (19)
	65～69歳	36.9	45.7	0.0	17.4	100.0 (46)
	70～74歳	34.4	37.5	3.1	25.0	100.0 (32)
	75～79歳	33.3	29.6	7.4	29.6	100.0 (27)
	80～　歳	33.4	33.3	0.0	33.4	100.0 (15)
	小　計	36.7	39.6	2.1	21.6	100.0 (139)
農村	60～64歳	19.2	57.7	0.0	23.1	100.0 (26)
	65～69歳	30.4	45.4	3.0	21.2	100.0 (33)
	70～74歳	25.9	48.1	0.0	25.9	100.0 (27)
	75～79歳	36.9	31.6	5.3	26.4	100.0 (19)
	80～　歳	50.0	50.0	0.0	0.0	100.0 (12)
	小　計	29.9	47.0	1.7	21.4	100.0 (117)
60歳以上合計		26.3	42.9	2.0	21.5	100.0 (256)

課題と提言

以上の分析の中で、日本の高齢者は生きがいを大切にし、あまりぜいたくをせず、かなり遠慮がちに今後の生活を大切にする傾向が出ていた。しかし年をとってから積極的に何かをするという内容は少ない。

第1に、生きがい問題を考えたい。この中で「レジャー生活重視」の人は、テレビなどの鑑賞を大切にしている。むしろ家の格式にこだわる傾向がつよいし、また食生活などでは男女差がかなり出ている。これはその時になって生活をかえることはむずかしく、若い時からの趣味仲間をつくり幅広い生きがいを活動が必要だと考えられる。

第2に、健康問題である。栄養バランスを考える人は意外に少ないが、とくに男性に弱い。また身体を動かすことを考える人もほんの一部しかない。今回の調査が、老人クラブの活動に参加している人達であったことを考えると、高齢者全体では、もっと健康保持のための意識的向上・具体的活動が要求されよう。

第3に、経済問題である。これはいわゆる公的年金への依存度はきわめて高く、ついで退職金貯金、私的年金への依存希望である。しかしかなりの人が一応安定性を得ているように思われた。またかなりの人が経済的自立化を考えている。しかし子どもからの援助を期待する人も若干いる。全体的に経済準備はそこそこなされており、つゝましい老後を考えている。

第4に、介護問題は、老後生活のスタイルに分析の中で、「親孝行の子を育てる」と考える人も若干あったが、この面の準備がやゝ弱いようである。日常から家族関係・近所の人との関係を早くからよくしていくことが必要であろう。

全般的に高齢者へ向う準備意識が弱い。これをライフステージ別によると、若・中年層は住宅や教育などに対する負担は大きく、そのため老後生活の準備意識は弱くなる。むしろおくればせで60歳頃になってようやく老後を考えるようになる。また高齢者の生活費は、公的年金のものでは十分でないにもかゝわらず、その援助に対する期待は大きい。

現在のような状態で豊かな老後を考えるには、どうしても公的な福祉の充実に関心をもつべきであるし、早期から自分で準備努力する姿勢をもつ生涯学習をさせる指導が必要である。

注1)須田博司他、ライフスタイル別生活意識と経済準備。第1報ライフスタイルと経済準備
東海女子短期大学紀要第18号　1992年3月
2)　同　　上　　54頁
3)本文はじめにの備考参照
4)　同　　上

参考文献

1．小林綏枝・小柳長明・木間昭子　高齢者の自立をめぐる生活問題－高齢期生活の実態調査から－国民生活研究　第29巻1号　1989年6月
2．須田博司他、ライフスタイル別生活意識と経済準備　第1報ライフスタイルと生活意識　第2報ライフスタイルと経済準備　東海女子短期大学紀要第18号　1992年3月
3．生保文化センター　老後の生活設計に関する調査　平成2年5月
4．堀田剛基地　高齢化社会への生活準備に関する研究　岐阜大学教育（人文科学）39巻　1992年3月
5．統計研究会　女性のライフサイクルはこう変わる　生命保険文化センター委託　調査報告書　昭和63年3月
6．統計研究会　高齢者のコーホート的分析　生命保険文化センター委託　平成3年1月